

教育講演 12

産声を上げる時、息を引き取る時に耳を澄ませて向かい合う

内藤いづみ

今回の私の講演のタイトルは、長年愛知県で妊婦本人の力を育み、自然な分娩へ向かう手助けしてきた故・吉村 正先生と私のご縁を繋げてくれた友人の創った言葉だ。

吉村先生と私の対談イベントには、臨月の妊婦たちも参加してくれた。私が持参した臨終の祖母を囲み、体を撫で、声を掛け、その看取りを支える家族の動画を見た妊婦たちが「お産と似ている！」そう感想を口にした。産まれる時といのちが終わる時、本当に似ているのだろうか？現代はその現場はほとんど病院や施設であることが多い。医療的介入も大きい。

私は30年以上在宅ホスピスケアを実践し、仲間と共にいのちの学びを続けている医者である。私は昭和31年生まれ。思い出してみると、山梨県のいなかの暮らしの中で、祖母たちは家で看取られた。それに続く通夜も葬式も野辺の送りも埋葬（土葬）も地域の人と共に執り行われ、特に家で賑やかに繰り広げられる葬儀後の宴席を眺めている幼い私の目には、まるで祝祭のように映った。「人の死は悲しくないのだろうか？」大人たちを見て幼い私は戸惑いながらそう思った。

暮らしの中のいのちの誕生と看取りを、その時代の空気感と共に体験した私には、医者になってからの、特に病院でのいのちの最期の取り扱い方には納得のいかない部分が大きく存在した。豊かな祝祭とは程遠いものであったから。その思いが30年以上前の初めての在宅ホスピスケアによる看取りへと繋がったように思う。そして、その後自分なりのいのちの哲学を深めてきた。

いのちの誕生、産声を上げる時は「いらっしやい」と温かでたくましい手に迎えられる。この世を去る時（息を引き取る時）は「ありがとう、さようなら」と言い残せる。「よく頑張ったね」という言葉で包まれて。もし多くの人がそんないのちの始まりと終わりを持てたなら、そういう社会は豊かで幸せな人生を送れる社会ではないだろうか？今の日本はどんな方向に進んでいるのだろうか？と時々考える。

私は、吉村先生と直接お会いする前、偶然先生の本と出会い、それをお守りに80年代のイギリスでふたりの子供を産んだ。イギリスでは正常分娩は主に助産師によって支えられる全人的ケアだった。産む人、産まれてくる赤ちゃんの力をサポートされた。そして、その国には死に逝く人を支えるホスピスケアがあった。そのどちらもいのちの主人公の力を信じ、尊厳を守る実践と哲学は共

通していると感じた。今回は私が出会った患者と家族と共に、吉村 正先生のもとで赤ちゃんを産んだ喜びの写真もお見せした。

実は、今回の講演の後、96歳の母が老衰でターミナル期になった。ほぼ昏睡状態で、時々目を開けるだけで、口から入れようとする水分も嫌がった。点滴なども家族の了解の上で中止した。以後10日間、安らかに過ごす傍に付き添うことができた。痰のからみもむくみも無く、亡くなるその日まで安らかで、バイタルも安定していた。最期の時、大きく息を引き取り、小さく吐く声を出して旅立った。私はそれが、この世に産まれた赤ちゃんのおぎゃーという誕生の声に呼応する、あの世への誕生の声のように思えてならなかった。

いのちは循環していく。いのちの源から懐かしい場所へ訪れ、そしてまたいのちの源へ戻っていく。

「懐かしい」ということを数学者 岡 潔博士はこう述べている。

人は本来、ただそこにいるだけで懐かしいのだと岡は言う。「懐かしい」というのは、必ずしも過去や記憶のことではない。周囲と心を通わせ合って、自分が確かに世界に属していると実感するとき、人は「懐かしい」と感じるのである。だから、自他が分離する前の赤ん坊にとっては、外界のすべてが懐かしい。その懐かしいということが嬉しい。

生きているという経験の通奏低音は「懐かしさと喜び」なのだ。これが、岡の根本的な信念である。

「懐かしい」という場所に来た人、そこからのいのちの源に帰る人、それを私は幸せなお産、幸せな最期と呼びたい。